

多胎児の生活歴

分担協力者

馬場 一雄・田崎 啓介
藤井 裕

1. 研究目的

鹿児島市立病院において、昭和51年1月31日に出生した五つ子について、前年度にひきつづき五つ子の生活歴、特に身体的計測、生活面、疾病歴などを記録集積し、今後の多胎児出生後の一つの指標となりうればとの考えより、五つ子の生活歴を記録した。

2. 研究方法

前年度と同じく週一回、研究協力者が自宅訪問の形をとり、身体的異常の有無の記録、ベビーシッターによる五つ子の日常生活の記録、三カ月ごとの幼児定期検診による身体計測値を測定した。

3. 研究結果

五つ子のそれぞれにおける、出生時、一才時、二才時、二才半時、三才時の身長、体重、頭囲、胸囲の身体計測値は表-1のごとく集計された。

満三才時までにおける年次別身体計測値を厚生省調査(1970年)¹⁾の乳幼児身体発育値にあてはめ標準偏差値をもって示したものが表-2である。これによれば身長では、男児は三才時で $-1.6 \sim -0.2$ SD、女児は $-1.4 \sim -0.8$ SDであった。同様に三才時における体重では男児 $-1.6 \sim -0.8$ SD、女児 $-2.4 \sim -1.0$ SDであった。頭囲では男児は $+1.4 \sim +0.1$ SD、女児は $-0.8 \sim +0.8$ SDの範囲内であった。

満三才時の身長、頭囲に関しては五人とも ± 2 SD以内に入っており年次的に漸時、標準値への追いつき経過を示している。体重に関しては満三才時で第五子が -2.4 SDと少く体重増加不良を示していた。

更に年次別に身長、体重の計測値を厚生省調査の乳幼児身体発育値の $+\frac{3}{2}$ SD、 $-\frac{3}{2}$ SDに分け男女別にあてはめたものが図1~4である。身長に関しては図-1のごとく第一子は二才の時点で $-\frac{3}{2}$ SD以上であるが、第三子は三才の時点でも $-\frac{3}{2}$ SD以下である。女児における身長は図-2のごとく三才時まで全て $-\frac{3}{2}$ SD以上の範囲内に入っていた。体重については図-3のごとく第三子が $-\frac{3}{2}$ SD以下であり体重増加

不良であった。女児では図-4のごとく第五子をのぞき、第二子、四子は三才時で $-\frac{3}{2}$ SD以上を示していた。第五子のみは -2.4 SDであるため身長の伸びは良いのにもかかわらず体重の増加は得られていない。第三子は身長、体重ともに遅れがみられている。

乳歯の発育面では第一、二、四、五子は上下合計20本であり、第三子のみが18本であったことより、第三子は身長、体重での発育面での遅れが歯科的影響を与えているのではないかと推定された。

生活面では、社会性、運動、短的発達、感情などにつき記録されたものが別紙のごとく集積されている。これによると運動面では、生後二才半時より積極的に外出もしたが、すべり台をおお向けに寝てすべる、ぶらんこに立ち乗りして自分でこぐなど五才位の機能を持つまでとなっている。行動面では同年令の五人が常に同一生活をしているためか、外出しても常に集団の形をとり他人(同一年令児)への接触のしかた、働きかけが一掃的に遅れているのではないかと考えられた。探索面では積み木で長い線路や駅をつくり30分以上遊ぶことや、鉄とりのりを使い紙で簡単なものを作ることができる。社会面ではお互いに順番にものを使ったり、互いに主張したり、妥協しながら遊ぶことができるようになってきている。生活習慣面では二才半ごろより排尿、排便が出来るようになった。食卓では大人の世話なしに食べることができ、上衣をひとりできることができ、母親のあと追いをしないなどとなり始めた。言語面では絵本をみながら、子供同志がいろいろなことを話し合ったり、その役割を演じることができるようになった。

疾病歴では特に大きな疾患はないが、感冒に罹患し易く、月一回の頻度であり一般乳幼児に比較するとやや多く、治療まで(五人全員の)に約二週間を必要としていた。従来のパターンには一定のものを認めていない。

4. 考 察

経時的な五人の身体計測値よりみると、漸次厚生省

の標準値に近づいているものといえよう。ただしこれら五人の出生は在胎37週2日という低出生体重児であるため、低出生体重児の発育経過を考慮せねばならない。

船川²⁾の在胎週数別出生時の身長、体重よりみたものでは、五人の身長は男児で $-3.0 \sim -4.0$ SD、女児で $-1.9 \sim -6.7$ SDである。体重については男児 $-3.4 \sim -4.3$ SD、女児 $-2.7 \sim -4.9$ SDである。これらはLubchencho³⁾らのpenverグループのSmall for dates babyに一致する。

SFD児の長期予後についての報告は数少ないが、岡本⁴⁾らのデータよりもとづき三才の時点での比較をみると出生時よりの身長では五人とも全て -2 SD以下であるためD群に分類される。三才時点では $-\frac{2}{3}$ SD以上のもの第一、二、四子、 $-\frac{3}{2}$ SD以下のものは第三、五子である。岡本らにおける三才時の身長計測では $-\frac{3}{2}$ SD以下のものは22.2%にみられるという。体重については $-\frac{3}{2}$ SD以上のものは第一、二、四、五子であり、 $-\frac{3}{2}$ SD以下のものは第三子のみであるがこれも26.3%にみられることより今後の経過を追跡する必要があるといえよう。特に第三子は身長、体重とも厚生省の標準値の $-\frac{3}{2}$ SD以下であるため、今後嚴重なる観察が必要であろう。また第三子のみ乳歯の萌出状態が遅れているため、歯科的検討が必要であろうと考えられた。

生活面では三才時点では母親のあと追いをしないなど自己主張がはっきりし始め、絵本などの主人公の役割を演ずることなどがあり、総合的には三才以上の年令と考えられるが、これは子供の環境によるものかの評価を行うことが必要と考えられた。

5. 要 約

三才時における五人の身体計測値は身長、頭囲に関しては ± 2 SD以内に入っていることより年次的に標準値への追いつき経過をしめしている。体重については第五子が -2.4 SDと少く体重増加不良を示していた。

身長、体重を $\pm \frac{2}{3}$ SDよりみると第三子のみが身長、体重では遅れていた。但し低出生体重児の三才時においては22.7~26.3%にみられるため経過を追う必要がある。生活面では同年令が同一生活協同体のため協調性をみとめるが同年令の他児との協調性の有無を追跡する必要があるであろうと考えられた。

文 献

- 1) 小児保健研究 29 ; 154, 1971 より
- 2) 船川 幡夫 日本新生児学会雑誌 4; 129, 1968
- 3) Lubchencho. L.O, et. al. J. Pediat. 71; 159, 1967
- 4) 岡本 健治 日本新生児学会雑誌 8; 258, 1972

圖-1 身長(♂)

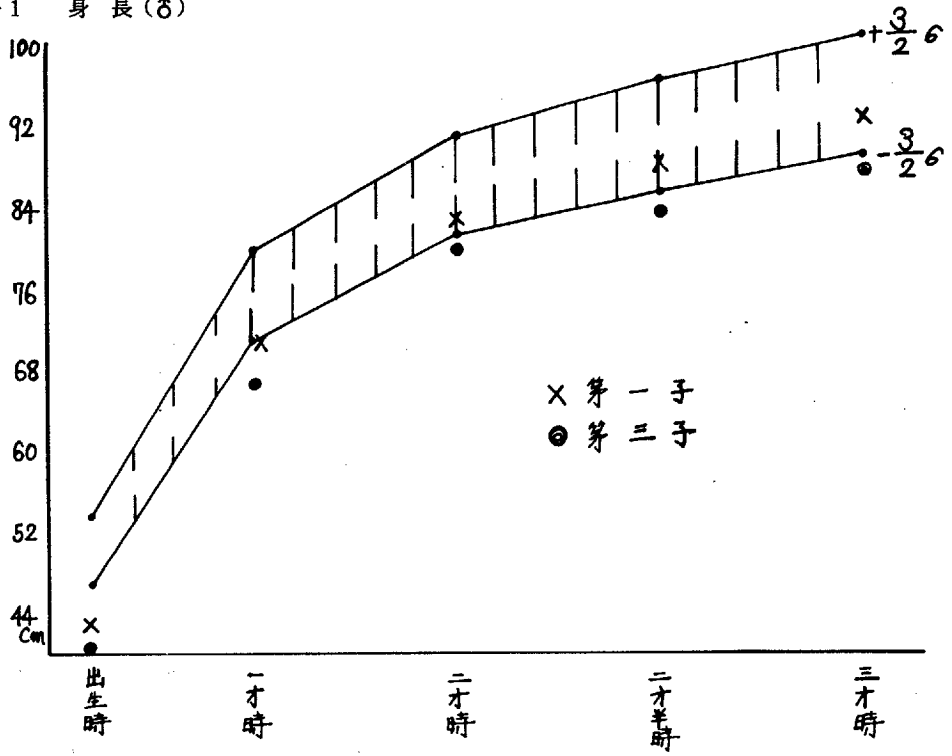
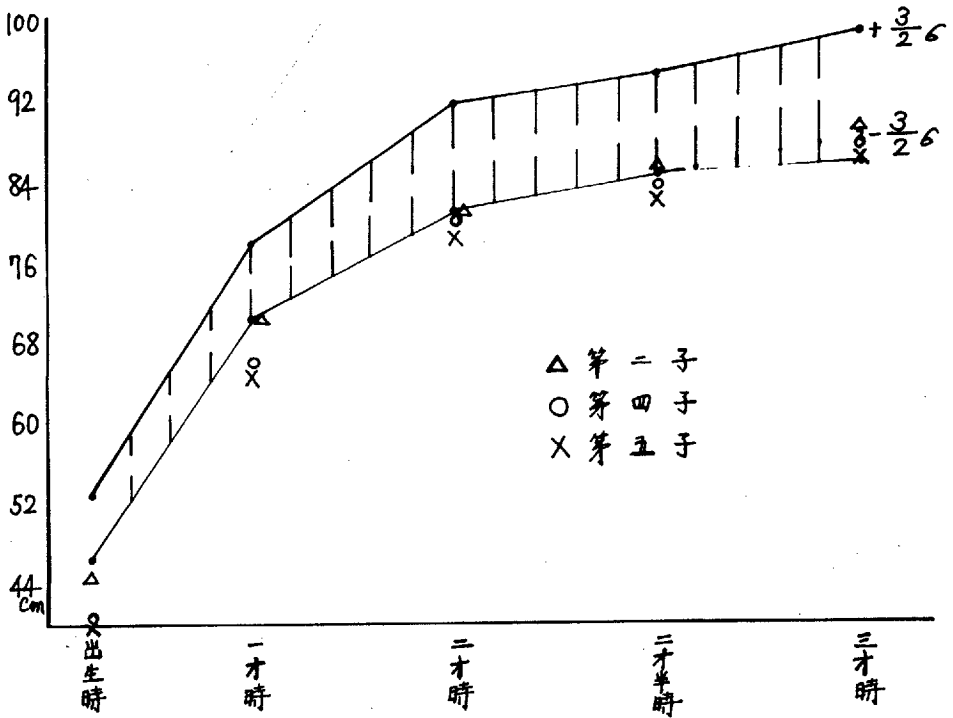


圖-2 身長(♀)



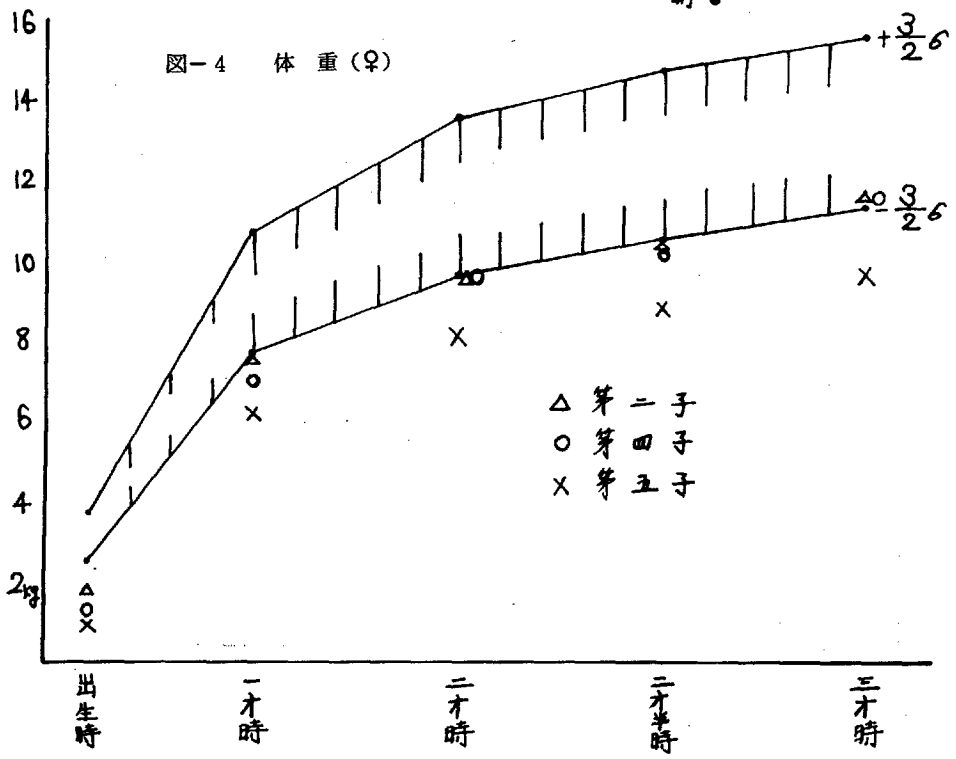
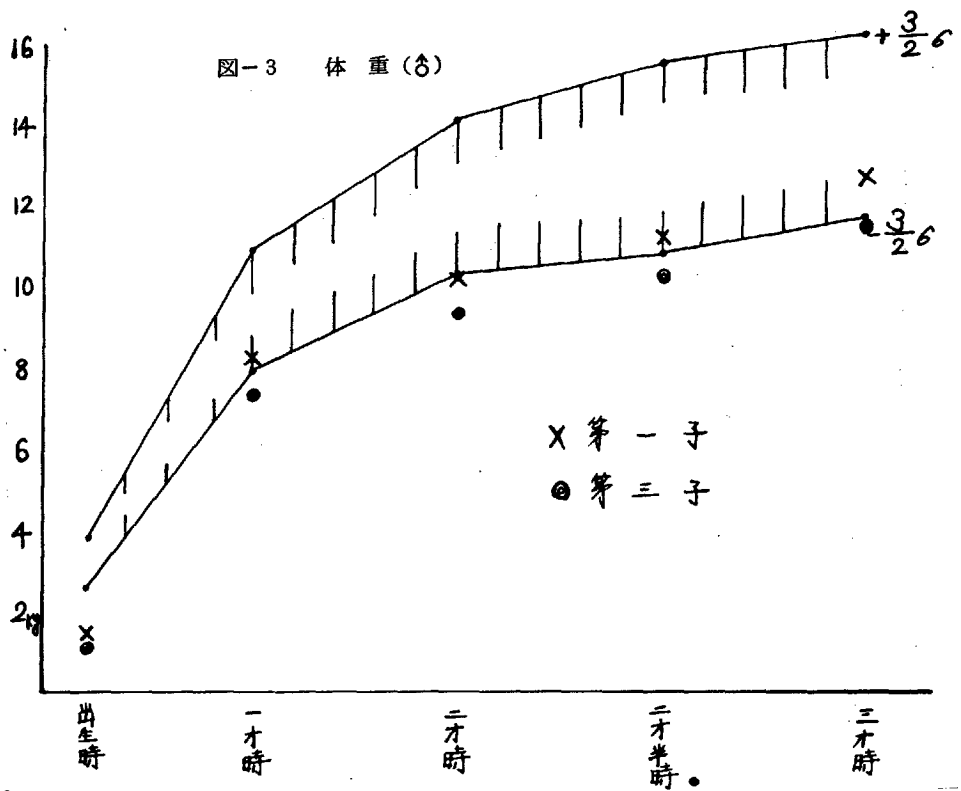


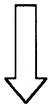
表-1 身体計測値

		出生時	一才時	二才時	二才半時	三才時
第一子 (♂)	体重	1,480 ^g	8,200	10,200	11,250	12,700
	身長	43 ^{cm}	70.7	83	88.1	92.5
	頭囲	31.3 ^{cm}	47	47	51	52
	胸囲	24 ^{cm}	43	47	51	52
第二子 (♀)	体重	1,800 ^g	7,510	9,670	10,400	11,660
	身長	45 ^{cm}	70	81	84.9	89
	頭囲	31.5 ^{cm}	46	48.5	49	50
	胸囲	25 ^{cm}	42	47	46.5	51
第三子 (♂)	体重	1,130 ^g	7,340	9,290	10,230	11,510
	身長	41 ^{cm}	66.5	79.3	83.1	87.1
	頭囲	30 ^{cm}	46.8	49.5	49	51.4
	胸囲	21.2 ^{cm}	43	45.5	47.5	48.5
第四子 (♀)	体重	1,300 ^g	7,000	9,630	10,200	11,520
	身長	43 ^{cm}	67.3	79.5	84.2	88.6
	頭囲	29 ^{cm}	46	48	47	50
	胸囲	22.5 ^{cm}	43	46.5	48	49.5
第五子 (♀)	体重	990 ^g	6,150	8,140	8,800	9,750
	身長	36 ^{cm}	65	78	82	87
	頭囲	26.9 ^{cm}	44	46.7	46.5	47
	胸囲	20 ^{cm}	40	43	45	48.5

表-2 身体計測値

	第一子 (♂)	第二子 (♀)	第三子 (♂)	第四子 (♀)	第五子 (♀)
※ 出	一才 二才半三才	一才 二才 二才半三才	一才 二才 二才半三才	一才 二才 二才半三才	一才 二才 二才半三才
身 cm	43 70.7 83 88.1 92.5	45 70 81 84.9 89	41 66.5 79.3 83.1 87.1	43 67.3 79.5 84.2 88.6	36 65 78 82 87
長 SD	-3.2 -1.8 -0.8 +0.3 -0.2	-2.2 -1.6 -1.1 -0.3 -0.8	-4.1 -3.4 -2.0 -1.2 -1.6	-3.1 -2.7 -1.6 -0.5 -0.9	-6.5 -3.5 -2.0 -1.2 -1.4
体 kg	1.48 8.2 10.2 11.2 12.7	1.8 7.5 9.6 10.4 11.6	1.1 7.3 9.2 10.2 11.5	1.3 7.0 9.6 10.2 11.5	0.9 6.1 8.1 8.8 9.7
重 SD	-4.3 -1.3 -1.1 -0.8 -0.8	-3.2 -1.6 -1.5 -1.0 -1.0	-5.1 -2.2 -1.8 -1.6 -1.6	-4.5 -2.1 -1.6 -1.1 -1.1	-5.2 -2.9 -2.6 -2.2 -2.4
頭 cm	31.3 47 47 51 52	31.5 46 48.5 49 50	30 46.8 49.5 49 51.4	29 46 48 48 50	26.9 44 46.5 46.5 47
囲 SD	-1.4 +0.3 -1.1 +1.2 +1.4	-1.0 +0.3 +0.6 +0.7 +0.8	-2.3 +0.1 +0.4 +0 +0.1	-2.7 +0.3 +0.3 +0.1 +0.8	-4.1 -0.9 -0.5 -0.7 -0.8

※ 出生時



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

鹿児島市立病院において、昭和 51 年 1 月 31 日に出生した五つ子について、前年度にひきつづき五つ子の生活歴、特に身体的計測、生活面、疾病歴などを記録集積し、今後の多胎児出生後の一つの指標となりうればとの考えより、五つ子の生活歴を記録した。